

4つの前提と8つの留意点

森住 衛

(桜美林大学)

はじめに

題目の「発話を促すために」は「教育を行うために」と言い換えられる。「発話を促す」とは、究極のところ、「生徒の気持ちを引き出す・持って生まれた才能を引き出す」ことであり、教育 (education) も、educate という動詞が示しているように、「才能や能力を引き出す」ことであるからである。筆者は、本誌の前身である『三省堂英語教育—中学編』41号で、「教師・教材の触媒説」を唱えたことがある。このときは、生徒の「自ら考える力」はどのようにして出させるかという議論であったが、小論では、発話というさらに広い範囲で、生徒の能力や才能を引き出すための工夫を考えてみたい。いわば、生徒の発話を促すために、どのような「触媒」があるか、使うときにどのような注意が必要かなどの議論になる。

1. 発話の内実(メカニズム)—4つの前提

人間の発話の内実(メカニズム)は人間の精神生活すべてといってよいくらい複雑である。小論で取り上げる「発話」は、とりあえず、「英語の授業において生徒が口頭で発する行為」とするが、このように狭めてみても、その内実は複雑である。発話の意欲やきっかけ、形式、質、量、そして、質問を聴き取る能力、これを判断して内容を構築し、言語化する能力など多重な要素が絡み合っ、発話が生まれる。発話促進の議論の前提として、大ざっぱであるが、この複雑な内実の一端を押さえておきたい。

1) まず、発話の意欲や動機である。普通の日常生活でも気分がのらないときは口をききたくない。内容がよくわかっているトピックだったら、いわゆるスキーマがあるので、話しやすい。生徒の発話を促

すには、教師はかれらのその日の気分や話題のスキーマを知っていることが前提になる。これは、学習者中心主義の基本でもある。

2) 発話を促す形式にもいろいろある。問いかけや質問に答えてもらうものから、自発的な発言などさまざまである。問いかけや質問も、授業のウォーミングアップに使う What did you do last Sunday? などや、教室英語の Do you have any questions? などもある。Oral Introduction あるいは Oral Interaction のときのやりとりの Q&A もある。これらの問いかけのやり方によって生徒の反応も変わってくる。教師はこの TPO を知らなければならない。

3) 発話の質つまり内容の種類や軽重はどうだろうか。これも、簡単な挨拶の応答から、依頼、感謝、発問などの生活レベルのやりとりなどを経て、深い自己表見に至るまで、いろいろある。この多様性は、分量に比例する場合がある。挨拶や Yes / No の応答は、一語一句の発話であるが、Did you go anywhere last Sunday?—Yes, I did. I went to the Ghibli Museum. など定型の会話パターン、そして、Show & Tell, 3分間スピーチなど、結構な分量の発話を行う場合がある。逆に、問いかけや質問に対して応答ゼロの場合もある。

4) 問いかけや質問に対する生徒の一連の反応は、概略すると以下のように整理ができる。

- a. 無反応、無表情、拒否反応。
- b. 興味・関心がありそうな表示。
- c. 頷首、微笑などの最低限の反応。
- d. Yes, No などの1語の返答。
- e. 複数の語から成る発話、文単位の発話。
- f. 2つ、3つの文を合わせた発話、文章での発話。
- g. スピーチ、報告などまとまった内容の発話。

これらのいずれの段階も小論のテーマに関係しているが、以下に順不同のオムニバス風に、留意点を挙げていきたい。

2. 発話を促すための8つの留意点

1) 大切な普段の T-S Communication

上記 a～g のうち、最も深刻なのは a の場合である。何を聞いても無反応、無表情な場合がある。いや、顔を教師のほうに向けない場合すらある。本特集を取り上げた目的のひとつは、このような深刻な事態にどのように対処するかも含まれるのであるが、これは厳しい。名案がない。このような場合は、とりあえず英語をわきにおいて、日本語でのコミュニケーションをとることである。日本語ですら拒否反応、となると、これは英語の授業だけの問題ではなくなる。学習態度全般の問題、あるいは生徒と教師の人間関係の問題にある。無言の回答でも、上記の b の段階にまでもっていければ、打開の可能性は大きく広がる。そして、c の段階にまで達すれば、つまり、うなずいてくれたり、微笑んでくれたりすれば、第一関門は通過したと考えてよい。このための最大の処方箋は、普段の T-S Communication をよくすることにある。

2) 3人答えなかったら、質問が悪い

英語の問いかげや質問に発話してくれない場合がある。理由は、質問の意味がわからない、質問の意味はわかったが答えがわからない、どちらの答えか決められない、である。質問の意味はわかった、答え方もわかった。でも、答えたくないときもあるかもしれない。気分がむしゃくしゃしている、先生がきらい、こんなくだらない問題に答えるのはばからしい、答えるのが恥ずかしいなどなどである。このような生徒の特殊な事情を除いては、「質問をして答えられなかったら、質問自体が悪いと思え」、という論がある。教師は、生徒が答えられるように質問せよ、という学習者中心主義である。これは教師にとって厳しすぎる。そこで、筆者は、生徒3人に質問して3人とも答えられなかったり、間違った答えが返ってきたりしたら、その質問自体がよくないと思え、としている。要は、発話を促す発問をする、ということである。

3) 表現の正確さはほどほどにする

生徒の発話の妨げになっている要素の中で、比較的多いのが発話の正確さに対する不安である。自分の答えは合っているだろうか、このような言い方でよいのだろうか、という不安が大きくなると、発話しなくなる。不完全でもよい、という雰囲気をつくっておくことが必要である。特に口頭の表現では、細かいことは「いい加減」でよい。単数複数の呼称や3人称単数現在形の -(e)s の有無、そして、冠詞の有無、定冠詞と不定冠詞の区別などは、原則として、意に介さないで、ときどき、こちらが言い換えるときにその部分を強調して、さりげなく誤りであることを知らせる程度でよい。例えば、生徒が教師に向かって *Do you like an orange? と聞いたとすると、Do I like oranges? Yes, I like oranges. と言い直す。*He is basketball player. と言ったら、He is a basketball player. と言い直すなどである。

4) 発音も完璧主義を避ける

発話を妨げる要素のもうひとつの大きな要素は、発音である。ほとんどの生徒は発音はうまくないと思っている。間違いではないかという不安が発話を妨げる。この部分も思いきって教師側が気にしてはいないということを意図的に示さなければならぬ。そのためにはいちいち直さない。ときどきさりげなくこちらの発話の中で言い直してやる。特に、個々の発音、例えば、[r] と [l]、[θ] や [w] など日本人が間違えやすい音について、コミュニケーションのために発話させているときは、直さないでもよい。直すのは、別の発音の指導や練習の時である。なお、発音関係では、上記の個々の発音よりもアクセントのほうが重要である。アクセントは音声のコミュニケーションの中でも特に重要であるため、コミュニケーションを中断しない程度に気がついた時点で留意させる。

5) 題材や話題と生徒の興味

発話を妨げる要因として教科書の題材や教師が取り出す話題がつまらないというのがある。この題材や話題の好みや関心は、最終的には、生徒個人個人によっても異なるので、一概にどの題材や話題がよいとは言えない。しかし、どの生徒が何に興味を持っているかを知っておくことは、発話を促す有力な要

素になる。そのために、学年初めに、教科書のどんな話題に興味を持っているか、アンケートなどをとっておくとよい。その生徒が興味のある課にきたら、意図的に指名したりするのである。なお、教科書の題材は、教科書そのものがすでに完成された教材なので変更はできないが、普段の活動の中で生徒に発問する例文は、教師が用意できる。このときにも、生徒の趣味、得意科目、クラブ活動などを知っていれば、その生徒にあわせた発問や課題が出せる。例えば、How many ~? が目標の表現の場合、質問する生徒のクラブ活動が卓球であれば、How many days a week do you have for your practicing table tennis? などと発問するのである。

6) とりあえずの発信のための決まり文句

質問が聴き取れなくて、あるいは意味がとれなくて発話できない場合がある。この場合には、生徒側が決まり文句を使って聞き返すことを教えておくのがよい。例えば、Pardon? / Once more please. / Please speak more slowly. などである。あるいは、自分はその答えはわからない、自分の意見は特にないなどの言い方も教えておく。I'm sorry I don't know. / I have no idea about it. などである。そして、これは初心者には向かないが、相手の言ったことに対しての反問もある。例えば、Do you like baseball? などと聞かれたら、Well, why do you ask me that question? などと聞き返すのである。これらは、一見、技術的な対処法であるように映るが、コミュニケーションを続けるという点では、重要な「発話態度の維持」といえる。

7) 自発的な発話促進のための雰囲気づくり

生徒が自ら質問してくる、自ら発話してくる場合がある。実は、これが最も望ましい段階である。自らの発話を促すには、教室の中に、自発的な発言や質問をしても恥ずかしくない状況、そうすることが望ましい雰囲気をつくれればよい。このためには、自発的な意見や質問があったら、まず、感謝すること、褒めること、そして、丁寧に答えることである。そして、さらによいのは、その質問によってさらに話題が発展していく、その質問によって教室の話題が変わっていくという例を提示することである。これは、教室が生徒の発議で動いていくという証左でも

あり、参加意識が高まる。なお、この種の雰囲気があるクラスの特徴として、意見や質問を、それも大きな声で積極的にする生徒が1人か2人いる。つまり、生徒の中に「触媒」の機能を果たす者がいるのである。このような生徒を育てるのも教師の役目である。

8) 書きことばによる発信

書きことばによる「発話」にも触れておきたい。当然ながら、話しことばとの違いがあり、これまでのような議論がすべて当てはまらないが、今回のテーマの「発話」を広義にとれば、書きことばの発信も含まれる。特集を「発話」とした以上、話しことばが主であるが、その趣旨は、書きことばによる応答も含まれている。Internet や e-mail をはじめ書くメッセージは、話すことに優るとも劣らず必要である。生徒の中にも、話すことは苦手だが、書くことはそうでもない、という者がいるだろう。このような場合は、書くことを奨励して、「発話」とみなしてもよい。これが、個性や特性を重んじた英語教育ということにもつながる。

おわりに

最後に、'silent students' について触れて、小論を終わりにしたい。生徒の中には性格的にも黙っていることのほうが好きな者がいるが、このような生徒にもできるだけ会話に参加してもらう努力は必要である。しかし、最終的には、その生徒の生き方は尊重したい。教える側が水辺まで案内はするが、水を飲むかどうかは本人に任せるとするのが、原則である。また、能力的にも'silent' になりがちな生徒がいる。教室全体の理解や練習のスピードについてこられないのである。時間があればなんとか答えられるのだが、かれらが発言するまで待っている余裕がない場合がある。そのようなときでも、クラスに参加できるようにしてあげたい。英語で発話できなくても、単語が出なくても、OK. とか、Thank you. You said 'Yes' by your gesture. などと励ましてあげたい。かれらは、発話はしていないが、きっと、考えたり、感じたりしてくれているのだから。